

2010年(平成22年)5月13日(木曜日)

当院のコクーンの記事が日経新聞に掲載されました。

日取前線

現場

陣痛の痛みに耐えながら分娩(ぶんべん)室に入ると目の前に海が……。出産時の母体への負担を軽減する取り組みのひとつとして、あおばウイメンズホスピタル(横浜市)は3月から、「癒やし」の映像や音楽によって妊婦をリラックスさせるユニークな分娩室「COOCOON(コクーン)」を導入した。

分娩の不安 癒やす「繭」



分娩台(手前)を取り囲むように映し出される映像は分娩の進み具合に応じて変化する(横浜市青葉区のおおばウイメンズホスピタル)

ームのようになっており、室内には気分が落ちつくような音楽が流れている。4台のプ

像は各段階に合わせて変化する。第1期に分娩室に入ると発光ダイオード(LED)で

部屋一面が青くなり、海と満月の映像が映し出される。阿部孝彦院長は「陣痛で興奮状態になった妊婦を少しでも落ちつかせるため、青い照明や海の映像を使った」と話す。通常の分娩室と違い天井に照明はないが、側壁にあるLED照明や无影灯などで手術に必要な光は確保できる。

3月の運用開始から既に100人近くがコクーンで出産したが、陣痛の痛みから興奮状態になる妊婦はわずかだという。阿部院長は「お産のつらさから『2度としたくない』という人もいる。演出で少しでも良い思い出にして、ぜひ2人目を産んでほしい」と話す。

ロジエクターが設置されており、側壁から天井にかけて、美しい自然風景などの映像を映し出してゆく。分娩は子宮口が開き始める第1期から、赤ちゃんが生まれて胎盤が出る第3期までの3段階があり、映像は各段階に合わせて変化する。第1期に分娩室に入ると発光ダイオード(LED)で部屋一面が青くなり、海と満月の映像が映し出される。阿部孝彦院長は「陣痛で興奮状態になった妊婦を少しでも落ちつかせるため、青い照明や海の映像を使った」と話す。通常の分娩室と違い天井に照明はないが、側壁にあるLED照明や无影灯などで手術に必要な光は確保できる。

先月30日に第1子の長男を出産した横浜市内の女性(30)は、子宮口全開から出産までの通常の4倍近い8時間もかかった長期戦になったが「痛みが長時間続いても、無機質な病室ではなく映像があったので落ちつくことができた」と話す。

医療